
原 著

治療を受けている再発転移後の肺がん患者が持つ見通し

木村有里¹⁾, 今井芳枝²⁾, 板東孝枝²⁾, 高橋亜希²⁾

¹⁾神戸大学医学部附属病院

²⁾徳島大学大学院医歯薬学研究部

(令和3年12月10日受付) (令和4年1月13日受理)

治療を受けている再発転移後の肺がん患者が持つ見通しを明らかにすることを目的とした。研究方法は質的記述的研究デザインで、再発転移後の肺がん患者13名に半構造化面接法を実施した。結果、【再発転移後だから死は自分の近くにある】【治療してるから今は大丈夫だが死はいつか来る】【成り行きに任せるしかない】【これまでの生活がこれからも続いていく】【治療してる限りは長らえられるだろう】の5つのカテゴリーが抽出された。これらの特徴としては、全員が死を見据えている見通しを持っていたことと2つ以上の見通しを同時に持つことであった。それは、繰り返す治療や死を連想させる症状が出現することや、将来に対する不確かさがあるという再発転移後の肺がん患者の特徴が表れていた。これより、治療を受けている再発転移後の肺がん患者が持つ見通しを確認することや、それぞれの見通しのあり様を多面的に捉えることの必要性が示唆された。

2018年の肺がんの死亡者数は74,120人で、部位別死亡数では男性は1位、女性は2位と高い順位にある¹⁾。加えて、肺がんの5年相対生存率は男性27.0%、女性43.2%である¹⁾ことから、予後の悪いがんであるといえる。また、肺がんは再発する危険性が高い疾患でもある²⁾。このことは、がんサバイバーとして生き残るためには、治療開始と共に自分の先行きに対する見通しをある程度持ちながら治療に臨む必要性を示唆している。実際に、70%の患者は、先行きに対する意思決定が必要な時に意思決定能力を持っていないことが報告³⁾されており、近年アドバンス・ケア・プランニング (以下 ACP) の必要性が指摘されている⁴⁾。特に、予後が厳しい再発転移後の肺がん患者では、治療を開始する前から患者がどのような見通しを持っているのかを確認し、支援する必要がある

るといえる。

しかし、治療中はその効果への期待を抱いていることから⁵⁾、予後に触れるような先行きの見通しに関する内容は聞きにくく、患者の望む終末期に向けた意思決定支援に踏み込みにくい現状がある。更に、ACPの開始時期については一致した見解は示されておらず⁴⁾、現場の個々の判断に委ねられている状況である。見通しに関する先行研究では、標準的治療を受けている進行非小細胞肺がん患者が自己の見通しを持つ体験の意味として、死を考えることで自分の生き方を考えることが明らかにされており⁶⁾、見通しを持つことの重要性が示唆されている。しかしながら、再発転移後の肺がん患者が治療を受けながらどのような見通しを持っているのか、見通しの具体的な内容を明らかにしている研究は見当たらなかった。進行が早く予後が不良である再発転移後の肺がん患者が持つ見通しそのものを明らかにすることは、患者が自分の命をどのように捉えているのかという現状を把握でき、治療中の意思決定支援の方法を見出すことができると考える。

そこで本研究では、治療を受けている再発転移後の肺がん患者が持つ見通しを明らかにし、治療を受けている段階から意図的な看護介入が展開できるように検討することを目的とした。

方 法

1. 研究協力者

2019年4月～9月にA大学病院にて、再発転移を告知され治療をしている肺がん患者とした。ただし、精神疾患を有する者や治療に伴う苦痛が著しい者は除外した。

2. データ収集・分析方法

病棟の主治医もしくは看護師長に研究協力者の選定を依頼し、同意を得られた研究協力者に個室で半構造化面接を実施した。面接内容は、今後の自分の見通しやこれからの生活をどのように考えているのかについて尋ね、1回の面接時間は1時間以内とした。なお、対象者から許可を得られた場合はICレコーダーで録音した。分析方法は、個別分析として①面接の逐語録を繰り返して読み、研究目的に関する内容が表現されたところの前後の文脈を考慮して簡潔な文章で表現した。②①で同様の内容や類似した内容のものを整理してコード化した。③さらに類似するコードをまとめて、その意味内容を表す名前を付け、サブカテゴリー化した。次に全体分析として④個別分析より得られたすべてのサブカテゴリーを集めて、さらに意味内容が類似したものを集めてカテゴリーとした。分析過程において、研究協力者に2回目の面接時に仮分析を示し、内容の真実性の確保に努めた。また、研究の全過程を通して、がん看護や質的研究の専門家からスーパーバイズを受け、分析の確証性の確保に努めた。

3. 倫理的配慮

本研究では、徳島大学病院臨床研究倫理審査委員会の承諾を得て実施した（承認番号3356）。研究協力者が治療中の肺がん患者であることから、今後の見通しを話すことで不快な感情が生じる可能性があるため、インタ

ビュー前後には必ず体調の変化を聞き、気分不良などが生じた時は申し出るように声かけを行い、急変時は対応が取れる状況下でインタビューを実施した。

4. 用語の定義

治療後に再びがんが出現したり、がんが最初に発生した臓器から肺にがんが移動し、増殖した患者とした。

治療：手術を除く、継続して行うがん薬物療法および放射線療法とした。

見通し：広辞苑⁷⁾では「将来のことを、見抜き察知すること、予測」と定義されており、本研究では将来、自分の命がどうなるのかということを決めるための「治療を受けている自分の命が将来どうなるか」と捉えているのかを明らかにするために、「治療を受けている自分の命が将来どうなるか」と捉えているのかという命の成り行き」とした。

結 果

研究協力者は、表1に示すように13名で研究の継続を断念するような副作用の出現や身体状況が悪化した者はいなかった。治療を受けている再発転移後の肺がん患者が持つ見通しとして、表2に示すように30コード、12サブカテゴリー、5カテゴリーに類型化された。カテゴリーを【】、サブカテゴリーを[]、コードを<>、研究協力者の語りを「斜字」で表した。

表1 研究協力者の概要

No	年齢	性別	病名(病期分類)	治療	PS	副作用	身体状態
A	70歳代	女性	非小細胞肺がん(ⅣA)	CT	0	なし	—
B	60歳代	男性	非小細胞肺がん(ⅢA)	CT	0	なし	疼痛あり
C	70歳代	男性	小細胞肺がん(ⅣA)	CT	0	なし	—
D	60歳代	男性	非小細胞肺がん(ⅣB)	CT, RT	0	なし	—
E	40歳代	男性	非小細胞肺がん(ⅢA)	CT	0	なし	—
F	70歳代	男性	非小細胞肺がん(ⅣB)	CT	0	なし	—
G	80歳代	男性	非小細胞肺がん(ⅣA)	CT	2	なし	酸素吸入
H	60歳代	女性	非小細胞肺がん(ⅣB)	CT	1	なし	左気胸
I	60歳代	男性	非小細胞肺がん(ⅣB)	CT	0	なし	—
J	70歳代	男性	非小細胞肺がん(ⅣB)	CT	2	口内炎	—
K	70歳代	男性	非小細胞肺がん(ⅣA)	CT	0	なし	—
L	60歳代	女性	非小細胞肺がん(ⅣA)	CT	1	口内炎	—
M	70歳代	男性	非小細胞肺がん(ⅣB)	CT	0	なし	—

—：特記事項なし、PS：パフォーマンスステータス、CT：化学療法、RT：放射線療法

表2 治療を受けている再発転移後の肺がん患者が持つ見通し

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
再発転移後だから死は自分の近くにある	再発転移してるから残りの人生は短い	これから先は死しかない
		痛みや抗がん剤の副作用があるから死は近い
		再発転移しているから残りの寿命は短い
		自分の命は後10年以内だろう
		アルクだから寿命は限られる
治療してるから今は大丈夫だが死はいつか来る	今までは治療してるけれどいずれ死が来る	再発転移でいつ死が訪れてもおかしくないから今を大切に生きる
		治療を受けて生きている今の生活を大切に作る
		肺がんだから他の人よりは早めに死ぬと腹をくくっている
		再発転移と年齢からいつ死が来てもおかしくない
成り行きに任せるしかない	再発転移してるから成るようにしか成らない	死は今日や明日ではない
		今は痛みや息苦しさがないからまだ死は近くない
		治療をしていてもいずれ効かなくなる
		肺がんが進行していつか死はやってくる
		今は再発転移の治療してるから死が来ないだけ
今までの生活がこれからも続いていく	今までと同じ生活が続く	何年も効く薬はないからまたいつか再発する
		肺がんがよくなることはない
		肺がんになったことは運命
治療してる限りは長らえられるだろう	治療してるから長く生きられるだろう	がんの進行はどうにもできない
		肺がんの治療は先生に託すしかない
		再発転移してる体だから成るようにしか成らない
		成り行き任せ
治療してる限りは長らえられるだろう	治療に期待できる余地がある	決まった寿命が来たら終わり
		今まで通りの生活が続いていく
		日々の生活をしていく
治療してる限りは長らえられるだろう	治療してるから長く生きられるだろう	肺がんによって生活は左右されない
		普通の人と同じ感覚
		抗がん剤を打ち続けている限り生きていける
治療してる限りは長らえられるだろう	治療に期待できる余地がある	治療を続けると生き延びることができる
		今の治療が効くだろう
		まだ使える薬が残っている

1. 治療を受けている再発転移後の肺がん患者が持つ見通し

1) 【再発転移後だから死は自分の近くにある】

実際の症状から〈これから先は死しかない〉と死を見据え〔再発転移してるから残りの人生は短い〕と感じていた。また、〔いつ死んでもおかしくないから今を大切に作る〕と考えながらも、自分は〈肺がんだから他の人よりは早めに死ぬと腹をくくっている〉と捉え、死と対峙しながら〔再発転移の今の状況を考えて死の覚悟を決めている〕思いを抱いていた。これより、【再発転移後だから死は自分の近くにある】は、今を大切にしたいという思いはあるが、自分は肺がんで再発転移をしている

から死はすぐ近くにあるという見通しだった。「おれはもう、手術がないんだったら先知れとんだらうって。やっぱり手術もできんわって言うぐらいいに至ったら、もう(自分の先は)ないんだらう。」とH氏は語った。

2) 【治療してるから今は大丈夫だが死はいつか来る】

現在は症状がないので、まだ死は遠い存在であり、〔症状がないから今すぐには死なない〕と感じていた。一方で、〈治療をしていてもいずれ効かなくなる〉ため〔今は治療してるけれどいずれ死が来る〕と考えていた。そして、これまでの再発転移の経験から〈何年も効く薬はないからまたいつか再発する〉ことや〔肺がんがよくなることはない〕と考えていた。これより、【治療してる

から今は大丈夫だが死はいつか来る】は、肺がんが治癒することはなく、いずれ自分にも死は訪れるという見通しだった。「元気にはならんじゃけん。とにかくな、死に一步一步、一步一步向こうへ近よりよるって。晩が来たか。また、一步一步近寄ったかー。こんなんじゃ。どっちみち、向こうへ行きよるとしか思わんけんな。」とK氏は語った。

3) 【成り行きに任せるしかない】

再発転移や（肺がんになったことは運命）と捉え、この先の命に対しては「自分ではどうにもできない」ことだと考えて受容しようとしていた。そして自分の〈決まった寿命が来たら終わり〉だと捉え、今後は「再発転移してるから成るようにしか成らない」と考え〈成り行き任せ〉で生きていこうとしていた。これより、【成り行きに任せるしかない】は、再発転移をしている現実を受容し、命の先行きは読めないため、自然な成り行きに任せて生きていこうという見通しだった。「治療とか病気にに関してとか想像できんし、成り行き任せよ。」とC氏は語った。

4) 【今までの生活がこれからも続いていく】

入院して肺がんの治療をしていることは生活の一部で、これからも「今までと同じ生活が続く」と感じていた。また、今は〈日々の生活をしていく〉ことを考えており、〈肺がんによって生活は左右されない〉ので「肺がんであっても変わらない生活」がこれからも続くという感覚を抱いていた。さらに、自分の命がどうなるのかは、〈普通の人と同じ感覚〉だと捉えていた。これより、【今までの生活がこれからも続いていく】は、治療や肺がんと関係なくこれからも今まで通りの生活が変わらずに続くという見通しだった。「健全者でもな、痛い時あるでえ。肩こりを持つとる人とか。まあ、そんなんと一緒じよ。わしは、健全者の時の考え方やけんな。今、ただ風邪引いとるんと一緒じゃ。」とI氏は語った。

5) 【治療してる限りは長らえられるだろう】

現在は治療しているため〈抗がん剤を打ち続けている限り生きていける〉と感じ、これからも〈治療を続けると生き延びることができる〉と考えており、「治療してるから長く生きられるだろう」という思いを抱いていた。そして、〈今の治療が効くだろう〉と期待し、自分には〈まだ使える薬が残っている〉と他の手段があると考え「治療に期待できる余地がある」と思っていた。これより、【治療してる限りは長らえられるだろう】は、まだ治療に期待しており治療をしている限りは生きていくこ

とができるという見通しだった。「この薬を打ち続けて、生きていけるとおってますから。普通の平均よりも。がんしたら、5年とかなんとかっておってますけど、もう私、10年やそこらは生きれるとおってますから。」とL氏は語った。

2. 治療を受けている再発転移後の肺がん患者が持つ見通しの特徴

治療を受けている再発転移後の肺がん患者が持つ見通しは、2つの特徴があった。1つ目は、【治療してるから今は大丈夫だが死はいつか来る】のカテゴリーは全員の語りの内容から抽出されており、治療中でも死を見据えていることが示された。2つ目は、複数の見通しを全員が持っていることであった。例えばE氏は、「アルク（ALK融合遺伝子という遺伝子異常が原因の肺がん）っていう特殊なやつになってしまっている以上はそう長生きはせんかなと。ステージ4っていったら、5年生存率4パーセントっていうところに入ってるんで。」と語り、【再発転移後だから死は自分の近くにある】という見通しを持っていた。一方で、「先週金曜日に点滴して、ちょっとこの辺のつかかりみたいなのが気持ち軽くなったんですよ。効いてるんかなっていうんがあるんで。これでまあもしかしたら何年か持つんじゃないかなっていうんがあるんで。」と【治療してる限りは長らえられるだろう】という2つの見通しを持ち合わせている状況だった。以上より、自分に死が訪れることを見据えながらも、今の治療に期待をしているという複数の見通しを持っていた。

考 察

ここでは、本研究結果に基づいて治療を受けている再発転移後の肺がん患者が持つ見通しの特徴について考察する。

1. 死を見据えている

見通しの1つである【治療してるから今は大丈夫だが死はいつか来る】は全員の語りの内容から抽出されており、治療を受けている再発転移後の肺がん患者は治療しながらも死を見据えていることが示唆された。これは、肺がんの5年相対生存率は他のがんに比べて低く¹⁾、進行・転移が早い²⁾ため余命が限られる³⁾という特徴から、「肺がん＝死」のイメージが患者にあるからだ⁴⁾と推察した。また、再発転移後の治療を受けている患者は、これまでの効果判定の際にProgressive Disease（病態進行）

と判断され治療変更しており、その度に死が近づいていることを実感するのだと考える。自分には無関係だと思っていた死が近づき実感することで、常に死を意識しながら過ごすようになる⁹⁾と報告されていることから、再発転移後の治療を繰り返すうちに死が自分に近づいたため、死を見据えるのだと考える。そして、肺がんの特徴的な症状として、呼吸困難と疼痛が挙げられるが、いずれの症状も死を連想させるといわれており、これらの症状が出現することで死を見据えるようになると推察した。

2. 複数の見通しを持っている

本研究の対象者は、1つの見通しではなく、複数の見通しを全員が持っていた。これは、再発転移後の肺がん患者の先行きの不確かさが背景にあると考えた。再発転移後の肺がん患者は、自分がどのような治療プロセスを歩むのかが見えづらく、先行きが曖昧で不確かな体験¹⁰⁾をしている。しかし、それと同時に、再発進行がん患者にとっては治療自体が希望になる¹¹⁾ともいわれており、先行きが不透明であるがゆえに持てる希望でもある。つまり、先行きの不確かさは不安や希望が生み出されることが推測でき、これが複数の見通しを持つことに繋がると考えた。また、不確かさが何らかのきっかけによって脅威と捉えられると、人はその脅威を緩和しようと対処を試みることが明らかにされている¹²⁾。本研究の肺がん患者も死に対する脅威を緩和させる対処として、複数の見通しを持つのではないかと推察した。

3. 看護実践への示唆

本研究の結果より、再発転移後の治療を受けている肺がん患者は、何らかの見通しを持ち、治療に臨んでいることが推察できた。特に、治療を受けていても、死を見据えた視点を持ち合わせており、患者なりの見解を持って治療を受けていることが伺えた。治療中には見通しを話せないだろうと医療者側で一方的な解釈をするのではなく、まずは患者自身に話し合える状況かどうかを確認する介入が必要であるといえる。また、複数の見通しを持っているため、多面的であることを念頭に置き、1度で解釈をするのではなく、何度か聞き患者の価値観を探りながら見通しのあり様を捉えることの重要性が示唆された。

結 論

治療を受けている再発転移後の肺がん患者が持つ見通しとして【再発転移後だから死は自分の近くにある】【治

療してるから今は大丈夫だが死はいつか来る】【成り行きに任せるしかない】【これまでの生活がこれからも続いていく】【治療してる限りは長らえられるだろう】の5つの見通しが明らかになった。また、全員が死を見据えており、見通しは複数あった。そのため、患者と話す時間を持ちそれぞれの見通しのあり様を捉えていく必要があると考える。

謝 辞

本研究にご協力下さいました研究協力者の皆様、研究協力施設の皆様に心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 国立がん研究センターがん情報サービス：がん登録・統計 https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/summary.html (2021年9月4日検索)
- 2) 中原善郎：再発・転移の病態と治療・看護 肺がん、月刊ナーシング, 33 : 51-52, 2013
- 3) Silveira, M. J., Kim, S. Y., Langa, K. M.: Advance directives and outcomes of surrogate decision making before death. *N Engl J Med.*, 362 : 1211-8, 2010
- 4) 西川満則, 長江弘子, 横江由理子：本人の意思を尊重する意思決定支援. 事例で学ぶアドバンス・ケア・プランニング, 第1版, 南江堂, 東京, pp2-3, 2017
- 5) 天野薫：エンドオブライフケア 実践知が導くケア技術(第5回)がん患者のエンドオブライフケア 死を意識する人々がその人らしく生き抜くことを支える. *看護技術*, 63 : 82-6, 2017
- 6) 濱田珠美, 小松浩子：標準的治療を受けている進行非小細胞肺がん患者の自己の見通しを持つ体験 *Palliative Care Research.*, 6(2) : 222-226, 2011
- 7) 新村出：広辞苑. 第4版, 岩波書店, 東京, pp2464, 1991
- 8) 橋本晴美, 神田清子：呼吸困難を抱える治療期進行肺がん患者の体験. *日本看護研究学会雑誌*, 34(1) : 1-73, 2011
- 9) 京田亜由美, 神田清子, 加藤咲子, 中澤健二 他：死を意識する病を抱える患者の死生観に関する研究内容の分析. *北関東医学*, 60(2) : 111-118, 2010

- 10) Refsgaard, B., Frederiksen, K.: Illness-related emotional experience of patients living with incurable lung cancer. *Cancer Nurs.*, **36** : 221-228, 2013
- 11) 角田明美, 望月留加, 神田清子: 死を認知した再発進行がん患者が希望を見いだすプロセス. *北関東医学*, **66(3)** : 201-209, 2016
- 12) 長坂育代, 眞嶋朋子: 外来で化学療法を受ける乳がんの女性が不確かさと折り合いをつけるプロセスを支える看護介入. *日本がん看護学会誌*, **27(1)** : 21-30, 2013

Prospects that lung cancer patients undergoing treatment after recurrence and metastasis have

Yuri Kimura¹⁾, Yoshie Imai²⁾, Takae Bando²⁾, and Aki Takahashi²⁾

¹⁾ *Kobe University Hospital, Hyogo, Japan*

²⁾ *School of Health Sciences, Tokushima University Graduate School of Biomedical Sciences, Tokushima, Japan*

SUMMARY

Abstract : This study aimed at clarifying prospects that lung cancer patients undergoing treatment after recurrence and metastasis have. The study method is based on the qualitative descriptive study design. A semi-structured interview was performed for 13 lung cancer patients undergoing treatment after recurrence and metastasis. As a result, the following five categories were extracted ; [Since it is recurrence and metastasis, the death is coming to me], [I am undergoing treatment so I'm alright now but I'll die someday], [Let a matter take its own course], [My life will be going as before] and [I will be living as long as I receive treatment]. Characteristics of the above are that all of the patients are ready to accept death and they had more than two prospects. They were characteristic of patients after recurrence and metastasis that symptoms that remind them of repeated treatment and death appear and there is uncertainty for their future. The above results have suggested the need to capture the state of each prospect while confirming the prospects of lung cancer patients under treatment after recurrence and metastasis.

Key words : recurrence and metastasis, lung cancer patient, prospect